

製糸都市の再生(3)

—豊橋蚕糸業の推移と現状—

大迫輝通

1 はじめに

豊橋は、かつて岡谷・前橋などとともに、わが国の代表的な製糸都市として知られ、第二次世界大戦に際しては、アメリカ軍機の爆撃によって壊滅的な打撃を受けたけれども、戦後、なお、わが国のシルクのまちとして重要な地位を占めている。

豊橋のシルク産業の大きな特徴は、玉糸製糸と繭取引にあるが、前者については、小渕志ちによって創始され、二川町（現在、豊橋市大岩町）で創業後、急速に普及して、豊橋はわが国玉糸製糸のメッカとして発展したものであり、後者については、今日の乾繭取引所（全国で豊橋・前橋の2か所）によって代表されるように、わが国繭取引の中心的地位を占めているのである。このような機能と特徴は、第二次世界大戦を契機として大きく縮小はしているけれども、今日もなお、強く維持されている。

ところで筆者は、往時の製糸都市岡谷と須坂市についてその再生をテーマに、第二次大戦前後の変容について調査報告¹⁾したが、本報告もまたこれらの研究に続くものである。岡谷・須坂ともに戦前は、広く知られた製糸都市であったが、戦中から戦後にかけて、岡谷は精密機械器具工業都市、須坂は電気機械器具工業都市として再生し、発展している。なお、須坂の場合、市域内の広大な農地は、桑園→りんご園へと完全に転換している。

豊橋の場合はどうであろうか。今日、ここでは、先の二つの都市におけるようなとくにめだつ工業は見当たらない。食品・繊維両製造品出荷額がやや多い程度である。一方、市域内に広

大な農地を有し、かつて広い桑園分布の見られた点では豊橋と須坂両市は酷似している。

第二次大戦末期、空爆により豊橋は、家屋の70%を焼失するという大被害を受けたが、空襲を経験しなかった岡谷・須坂両市と、この点は大きく相違している。

本稿は、かつて全国一とさえいわれた豊橋製糸業に焦点をあて、その変遷と現況、さらにこれに関連する諸企業（特絹糸業、繭取引業など）の実態や土地利用について考察し、もって豊橋再生の特徴の一端を明らかにしようとするものである。岡谷・須坂両市の再生との対照をめざすものであることはいうまでもない。

1) 大迫輝通「製糸都市の再生——岡谷市の場合——」藤岡謙二郎先生退官記念論文集『歴史地理研究と都市研究』（下）、大明堂、1978年、278～289ページ。

大迫輝通「製糸都市の再生（2）——須坂市の場合——」、『岐阜経済大学論集』第14巻第3号、1980年、119～153ページ。

大迫輝通『蚕糸業地域の比較研究——温帯日本と熱帯——』、古今書院、1983年、174～220ページ。

2 豊橋における製糸業の推移

——第二次世界大戦以前——

三河の国は、古代、とくに平安期においてわが国の代表的な養蚕・製糸国であり、上糸国（延喜式）として位置づけられ、「赤引糸」・「犬頭白糸」の名は著名であったというが、その後、明治期にいたるまでの間はみるべきものがなく、藩政期には、むしろ綿と木綿の産地として発展していた¹⁾。

三河地区の蚕糸業の発展は、明治期に入ってからのことである。

A 明治・大正期の豊橋製糸業

【推移の概観】 明治期に入り、開国にともなう生糸輸出の振興を背景に、全国的に養蚕業と製糸業が発展するが、ここ三河の地でも、豊橋を中心に蚕糸業が発達する。とくに明治前期には、士族授産の目的のほか、外国綿花の輸入増加とともに綿作が桑栽培に代わり²⁾、このような養蚕業の発達が製糸業の勃興を促した。養蚕業については改めて後述するとして、製糸業についてみると、豊橋市においては、1870年代後期における座繰製糸がその始まりである。すなわち、朝倉仁右衛門(1876年、豊橋本町で)、小沢志ち(1879年、二川町で)等の座繰製糸がそれであるが、器械製糸については、同じく朝倉仁右衛門等の細谷製糸株式会社(1883年)が愛知県における最初のものとなっている³⁾。

明治中期以降、わが国資本主義の発展にともない豊橋の製糸業も飛躍的な発展をとげる。

表1 豊橋製糸業の変遷(明治末～昭和前期)

	1911 (明・44)	1920 (大・9)	1930 (昭・5)	1938 (昭・13)
製糸場数	290	674	671	728
器械製糸	258	468	189	143
座繰製糸	6	83	425	553
玉糸製糸	26	123	57	32
製糸釜数		10,595釜	15,277	11,408
器械製糸	不	4,263	8,225	7,283
座繰製糸	明	375	1,832	1,638
玉糸製糸		5,957	5,220	2,487
生糸生産高	64,362貫	161,058	542,425	748,572
器械製糸	24,985	68,172	285,652	562,950
座繰製糸	180	2,978	18,552	21,746
玉糸製糸	19,320	89,908	238,221	158,876

豊橋市(1932年、付近町村編入で面積15.49→115.49km²)。愛知県統計書。

表1は、明治末期～昭和前期の間の豊橋市の製糸業の変遷を示したものであるが、これによってみよう。

この間は、わが国資本主義の勃興期にあたるが、日露戦争後、また第一次世界大戦に際してはかなりの振幅を示しながらも、全体として大きく伸張している。とくに第一次大戦を機とし

て繭ならびに生糸価格の高騰がほぼ大正期中中続いており⁴⁾、この時期に大きく伸びた。昭和期に入って価格は低落を始め、1929～30年の恐慌に際して暴落し、以後はほぼ明治末～大正初期のレベルに戻るが⁵⁾、この間は、低価格を生産増大によってカバーしようとした傾向がみられ、設備(釜数)こそ減っているが、生産高は伸びている。

表によれば、恐慌にいたるまでの間の伸びが大きく、企業数では1911～20年の間、生糸生産高では1920～30年の伸張がとくに大きい。

当初は、玉糸生産の伸張と比率が大きかったが、やがて器械製糸のウェイトが増して、恐慌時には、地位が逆転している。その後、器械生糸の生産はいっそう増大しているのに対し、玉糸は減少を示している。

【玉糸製糸について】 ここで、豊橋製糸の特徴である玉糸製糸について若干述べておく⁶⁾。

玉糸とは、玉繭(2頭の蚕児によって作られた大粒の繭)から引いた糸で、当初、玉繭は屑繭扱いで、真綿の材料として用いられていたのであるが、これより繰糸の方法を創始し⁷⁾、その普及に大きく貢献したのが、小沢志ちである。志ちは群馬県人で、たまたま二川町(現在豊橋市)に宿泊した折、この地の人びとに製糸の技術を教え、そのまま住み着いて、製糸工場を起こし(1879年)、その後、玉糸製糸の技術を工夫し、確立して、92(明治25)年から玉糸専業の工場へと転換している。88(明治21)年には、大林宇吉⁸⁾が、志ちの工場で玉糸繰糸の伝習を受けた工女6名を雇って、座繰玉糸の工場を起こしている。

宇吉は、その後95(明治28)年に、先の座繰玉糸工場を蒸気機関による器械玉糸工場に転換して大量生産の途を開いたが、これが機となって、この地方が玉糸製糸地帯として大きな発展をみることとなった。1902(明治35)年には、当時のロシアに対して、わが国初めての玉糸輸出が行われている。また、前年の1901(明治34)年には、大林宇吉等の盡力によって三遠玉糸製造同業組合(現在の三州玉糸生糸協同組合)が設立されている。

以後の発展については先の表にみるとおりで、明治末期の生産高19,300貫余が、恐慌時には238,000貫余へと12.3倍に増えている。ただ、器械製糸のこの間の伸び(13.8倍)に比べれば、その伸張の度合いは小さく、記述のように、当初の玉糸製糸が主、器械製糸従の態勢は、恐慌時には逆転し、以後は、ますます器械製糸との格差が広がっている。注目されるのは、玉糸製糸の1工場当たり、また1釜当たりの生糸生産高の大きいこと、これはいうまでもなく、工場規模の大きいこと、また生産性の高いことを示しており、この点では、器械製糸より優位に立っている⁹⁾。

なお、当時、玉繭は、産繭の20%程度もあったといわれるが、蚕種の改良や養蚕技術の向上によって漸次減少し、日露戦争以前、既に、組合(三遠玉糸製造同業組合)は中国華中付近より原料の玉繭を輸入し、内地産玉繭と合わせて使用している。また、このころにおける繭問屋の発生と活躍はとくに注目されるのであるが、これについては、項を改めて後述する。

B 昭和前期—最大期と戦中

既に見たように、豊橋製糸業は、第一次世界大戦後、さらに発展して最盛時をむかえる。すなわち工場数では1926(大正15)年(752工場、玉糸製糸は23年、343工場)、釜数では1929(昭和4)年(15,762釜、玉糸製糸27年、6,034釜)、生糸生産高は1931(昭和6)年(580,986貫、玉糸製糸31年、333,090貫)においてそれぞれ最大を示している¹⁰⁾。

そして、このころ、愛知県は長野県に次ぐわが国第二の製糸県として発展し、いうまでもなく、豊橋市がその核心をなしていた。

【最大期ころの豊橋製糸業】 「第十一次全国製糸工場調査」(農林省蚕糸局、昭和4年発行)によって、このころの豊橋製糸業の実体についてみることにする。

調査は、1927(昭和2)年度(1927年6月～28年5月)に営業した10釜以上の工場についてのものである。当時の全国工場数は3,293(器械製糸2,937,座繰製糸75,玉糸製糸281)、釜数は329,

371(器械309,612,座繰1,562,玉糸18,197)である。このうち、愛知県は工場数421,釜数33,477で、いずれも長野県に次いで第2位となっている。豊橋市は工場数204(現在市域では263)、釜数12,779(現在市域17,789)で、それぞれ愛知県の48.5%と38.2%を占めているが、その後編入した周辺町村の分(現在市域)も含めると、62.5%と53.1%の高い割合を占めている。

製糸都市として有名な岡谷も、当時はまだ市制を施行しておらず¹¹⁾、市町村別にみると、当時、豊橋市(1906年市制施行)は平野村(後の岡谷市)に次いで全国第二位の製糸都市であった。なお、これらに10釜以下の零細工場が加わるので、さらにその規模は大きくなる。

先ず、表2によってその起業年と組織についてみよう。現在の市域(新旧市域に区分)について示してある。大正期設立のものが最も多く、60%を占める。明治期のものが60あり、23%となっている。最も古いものは、1879(明治12)年6月創設の糸徳製糸場(玉糸工場、二川町)で、既述のように玉糸製糸の創始者として知られる小沢志ちの手になるものである。次いでは、器械製糸の戸田製糸場で、同年10月の設立である。これも二川町(当時、渥美郡、1955年豊橋市へ編入)にあり、豊橋製糸は二川町を起点として発展したことがうかがわれる。昭和期のわずか2か年程の間に46もの工場が開設されているが、これらは10釜台、20釜台の小さいものがほとんどで、この期における豊橋製糸業発展の趨勢を示す反面、零細工場の激しい消長の側面をも示しているように思われる。

組織別には個人経営が圧倒的である。とくに株式組織はわずか4工場にすぎない。

次に表3によって規模(釜数)別工場数をみると、30釜未満のものが88工場で、全体の3分の1を占めている。50釜未満では55%となっている。300釜以上は、急激に少なくなっている。最大は石川組製糸所の523釜である。ただ、玉糸製糸は、器械製糸や座繰製糸に比べて一般に規模が大きく、100～300釜のものが最も多い。460釜の大林製糸所(大林宇吉)が最大である。1工場当たりの平均釜数は器械製糸54釜、座繰製

A 起 業 年 表2 豊橋製糸工場の起業年と組織

	明 治 期					大正期	昭和期	合 計
	前 期	20年代	30年代	40年代	計			
器 械 製 糸	3) 3	1) 4	5) 8	9) 10	15) 25	99) 110	29) 35	143) 170
座 繰 製 糸)					6) 6	3) 3	9) 9
玉 糸 製 糸	1) 1	6) 7	10) 19	3) 8	19) 35	29) 41	5) 8	53) 84
計	4) 4	7) 11	15) 27	12) 18	34) 60	134) 157	37) 46	205) 263

上段：旧市内（調査当時一昭和2年一市域）の分、下段：新市域（昭和7,30年編入）の分。「第十一次全国製糸工場調査」（農林省蚕糸局）により作成。

B 組 織

	会 社				個 人	合 計
	株 式	合 資	合 名	計		
器 械 製 糸	3) 4	3) 5	4) 5	10) 14	133) 156	143) 170
座 繰 製 糸					9) 9	9) 9
玉 糸 製 糸		4) 4	3) 3	7) 7	46) 77	53) 84
計	3) 4	7) 9	7) 8	17) 21	188) 242	205) 263

上段・下段区分、資料ともに上表と同じ。

表3 規模別製糸工場数（豊橋市）

	10~30釜未満	30~50	50~70	70~100	100~300	300~500	500以上	合 計
器 械 製 糸	78 (32)	32 (16)	22 (12)	17 (10)	19 (10)	1	1	170 (80)
座 繰 製 糸	7 (4)	2						9 (4)
玉 糸 製 糸	3	22 (11)	14 (7)	18 (8)	23 (9)	4 (3)		84 (38)
計	88 (36)	56 (27)	36 (19)	35 (18)	42 (19)	5 (3)	1	263 (122)

釜数別工場数（現在の豊橋市域）を示す。カッコ内の数字は花田町所在の工場数（再掲）。資料は前表（表2）と同じ。

糸18釜、玉糸製糸は101釜となっている。

ここで、市内における工場分布について述べておこう。表に花田町の分をとくに示しておいたが、122工場、46%（旧市域では60%）がここに集中している。当時の花田町¹²⁾は、現在のそれと違い、南部および、東海道本線をこえてその東部にも広がっていたが、ここに製糸工場が密集していた。その他では、東田町、向山町のほ

か、二川町・牟呂吉田村（当時、渥美郡）がめだっていた。旧市域では、丁度、市街地を東西から挟む形で工場が分布していたが、とくに駅西（国鉄豊橋駅西側）地区に工場が密集していた。

表を欠くが、続いて従業員（職工）数についてみると、総数19,433人（男1,928人、女17,505人）で、女子が9割を占めている。1工場当た

表4 製糸工場の繭使用高・生糸生産数量
単位：貫

	工場数	重量	1工場当り
繭使用高	器械製糸	2,883,531	16,962
	座繰製糸	34,586	3,843
	玉糸製糸	3,174,261	37,789
	計	6,092,378	23,165
生糸生産高	器械製糸	262,459	1,544
	座繰製糸	2,865	318
	玉糸製糸	297,245	3,539
	計	562,569	2,139

昭和2年度。資料は前表(表2)と同じ。

り平均人員は、73.9人となるが、玉糸工場のみをとってみると114.9人となり、先の規模別工場数のそれと相対して多くなっている。器械製糸工場には、職員のほかに、1～2名の作業監督者と技術者をあげているものもある。

原料繭の使用高および生糸生産数量は表4に示すとおりである。原料繭は総量で約609万貫(22,846.4t)、1工場当たり平均2.3万貫(86.9t)であるが、玉糸工場では3.8万貫(13.3t)で器械工場の2倍以上を使用している。生糸生産数量は総量で56.3万貫(2,109.6t)、1工場当たり2,000貫余(8,021kg)で、これも玉糸の場合、器械生糸の2.3倍となっている。

生産物にはほかに屑物約20万貫がみられる。

なお、器械生糸については、輸出と地遣(国内向)別の区分があり、これによると、輸出生糸を生産するものが40(うち31は、輸出・地遣の両方)あり¹³⁾、残り130工場は地遣糸のみの生産となっている。数量は、輸出生糸164,288貫(616,080kg)、地遣糸98,071貫(367,766kg)で、その比率は1.7:1となり、輸出向が圧倒的に多い¹⁴⁾。大規模工場で輸出用、中・小工場は地遣糸生産の図式がはっきりとかがわれる。織度(器械製糸)は、21中生産が圧倒的に多くて、工場の65%を占め、次いではやや太い25中が22%となっている。ただし、輸出用生糸生産工場では、21中最優格生糸生産というのがほとんどである。

作業日数は、大部分の工場が300日をこえる

が¹⁵⁾、1工場当たり平均日数は器械製糸245日、座繰製糸254日、玉糸製糸265日となっており、玉糸工場が最も高い。

【戦中の状況(恐慌後から戦災まで)】

1930(昭和5)年、世界恐慌にともなう生糸相場の暴落によって、わが国の蚕糸業界は退勢へ向い、豊橋においても製糸工場、設備釜数など漸減を続ける。

その後、1931(昭和6)年勃発のいわゆる満洲事変は、37(昭和12)年には全面的な日中戦争へと拡大し、41(昭和16)年12月には、遂に太平洋戦争へ突入するが、その間、36(昭和11)年に産繭処理統制法、41年3月に蚕糸業統制法が公布されて、蚕糸業界はすべてが統制下におかれることになる。

恐慌後における豊橋製糸業は、既に触れたように(表1)、設備の減少にもかかわらず生糸生産高はむしろ増大しており、生糸価格の低迷を生産増大でカバーしようとした傾向がうかがわれる¹⁶⁾。

ところで、蚕糸業統制法の公布にともない、半官半民の日本蚕糸統制株式会社の設立をみ、また2年後(1943年)には日本蚕糸製造株式会社の設立があつて、全国工場の統一が行われ、わが国の蚕糸業は完全に統制機構のなかに組み込まれてしまう。すなわち、蚕糸製造会社の発足によってこれへの参加工場は、工場を提供し、会社は使用工場を決め、当面は貸借関係として、将来はこれを買収するというのであった。廃止工場には転廃業共助金を出している。また、未参加者は、これとは別に「全国共営蚕糸組合」を結成しているが、愛知県の有力業者は共営組合へ参加するものが多かった¹⁷⁾。

この間、1942(昭和17)年には企業整備令の公布によって、豊橋市内の器械製糸工場は29、設備釜数は3,209釜以下に激減しているが、このときの整備は50釜以下の中小工場を対象にしたもので、したがって権利の譲渡や買収(企画線獲得のため)が熾烈に行われ、結果的には大資本系列に吸収されることが多かった。

戦争の激化とともに、製糸の町豊橋も漸次軍需工場の町へと変容して行くが、製糸工場のな

かで、これへ転換するものも多く、製造会社設立時には、わずか4工場、747釜へと減少している¹⁸⁾。

表5は、その間の器械製糸工場の転移の状況を示したものであるが、存置の4工場以外は、軍需工場への転用7、廃止18となっている。

豊橋は、また数多くの座繰(足踏)業者があって、土間や納屋などで糸を引いていたが、1941(昭和16)年に437業者があり、これらの業者は統制下においては、座繰共同施設組合によって、原料の配給、生産糸の買上げを受けていた。しかし、これも企業整備によって廃業するものが多く、45(昭和20)年には68業者(452釜)に激減している¹⁹⁾。

玉糸製糸は、三遠玉糸製造同業組合によって強固に統一され、発展してきたが、1940(昭和15)年には三遠玉糸生糸共同施設組合を設立して、原料の共同購入から製品の販売まですべて組合が行い、統制機構の役割を果たしている²⁰⁾。この年の玉糸工場数は32²¹⁾であった。

豊橋の空襲は、1945(昭和20)年6月19日夜半から20日未明にかけてのことである。B29延90機、3時間余の波状攻撃を受け、この一回の爆撃で豊橋市街地は壊滅した。全戸数の70%が焼失、工場もそのほとんどが灰となった²²⁾。「花田町の製糸工場街は煙突だけが突っ立っていた」²³⁾という。

表5 器械製糸工場の整備状況

No.	工 場 名	所 在 地	整 備 状 況
1	㊦ 福井製糸工場	花田町	転用(北辰電機 → 荒井製作所豊橋工場)
2	㊧ 製糸工場	〃	廃止
3	㊨ 村田製糸工場	〃	廃止
4	㊩ 夏目製糸工場	〃	廃止
5	共栄組氏原製糸工場	〃	存置
6	㊪ 第三製糸工場	〃	転用(北辰電機) → 廃止
7	㊫ 花田製糸工場	〃	転用(北辰電機) → 廃止
8	㊬ 田村製糸工場	〃	廃止
9	㊭ 小松製糸工場	〃	廃止
10	内藤製糸工場	〃	転用(豊田工機) → 廃止
11	白河製糸工場	〃	転用(北辰電機) → 廃止
12	㊮ 大林製糸工場	〃	転用(航空廠) → 廃止
13	㊯ 清水池田工場	〃	転用(住友金属 → 住友金属国産科学)
14	㊰ 清水製糸工場	〃	廃止
15	郡是豊橋工場	前田南町	転用(愛知航空機 → 郡是工業豊橋工場)
16	三州石川組	向山町	存置
17	青木製糸工場	〃	廃止
18	㊱ 池田製糸工場	〃	廃止
19	鈴木製糸工場	〃	廃止
20	㊲ 小黒製糸工場	東田町	存置
21	㊳ 大林製糸工場	北島町	廃止
22	㊴ 福徳館	〃	廃止 → 転用(帝国航空)
23	㊵ 福井製糸工場	〃	存置 → 転用(帝国航空)
24	岡田	瓦町	廃止
25	㊶ 高橋	菰口町	廃止
26	水野	〃	廃止 → 転用(東亜航空)
27	㊷ 鈴木	下地町	存置 → 廃止
28	鈴木	山田町	転用(東洋通信機 → 東通国科)
29	共栄組後藤製糸工場	二川町	存置

昭和18年度。「豊橋市戦災復興誌」(昭和33年)による。

- 1) 『日本蚕糸業史』第二巻, 明文堂, 1935年, 10~18ページ。
『愛知県蚕糸業史』愛知県蚕糸業振興会, 1964年, 3~7, 20~32, 37~41, 147~150, 263~264ページ。
豊橋市近世民族資料調査委員会『豊橋蚕糸の歩み』, 1975年, 1~2, 76~77ページ。
- 2) 『愛知県蚕糸業史』前掲1), 147~150, 263~264ページ。
『豊橋蚕糸の歩み』前掲1), 76~77ページ。
なお, このときの絹の流通機構が, やがて繭の流通機構に替わり, 豊橋製糸の発展を促したといわれる(『愛知県蚕糸業史』, 264ページ)。
- 3) 『日本蚕糸業史』前掲1), 80ページ。
『愛知県蚕糸業史』前掲1), 265~267ページ。
『豊橋市史』, 第三巻, 1983年, 655~668ページ。
ただし, 製糸業勃興は尾張地区の方が早い。
- 4) 1920(大正9)年, 一時暴落。
- 5) 農林省蚕糸局『蚕糸業要覧』1953年。
- 6) 主として以下の資料によった。
『日本蚕糸業史』前掲1), 174~182ページ。
『愛知県蚕糸業史』前掲1), 317~329ページ。
『豊橋蚕糸の歩み』前掲1), 34~64ページ。
『豊橋市史』, 前掲3), 668~685ページ。
『愛知県特殊産業の由来』, 上巻, 愛知県実業教育振興会, 1941年, 472~481ページ。
豊田清子『小渕志ちと女工の生活』1982年, 5~45ページ。
- 7) 玉糸の名も彼女の命名。
- 8) 大林製糸所(現存)の創始者。
- 9) 現在は, 器械製糸における零細企業の淘汰と自動機の普及によって, この立場は逆転している。なお, 玉糸は, 節のあるその独特の風合いが喜ばれ, 紬織などに用いられてきたが, 今日では, 裏地, 洋服地, 壁紙, ふすま紙, 風呂敷などへと用途が広がっている。
- 10) 『愛知県統計書』。旧市域のみについて(1931年まで。32年には付近町村編入で市域拡大)。
- 11) 岡谷市は1936(昭和11)年, 市制施行。岡谷シルクの名は, 国鉄岡谷駅の名から起こった。中央本線は1905(明治38)年開通。
- 12) 旧花田村。1906(明治39)年, 豊岡村とともに豊橋町へ合併(同時に市制施行)。戦後の区画整理によって, 現在の花田町は往時より縮小。
- 13) 輸出と地遣31, 輸出のみ9, 地遣のみ130, 計170工場。
- 14) なお, 年度がややずれるが, 1929(昭和4)年における玉糸の国内仕向地(豊橋駅発送)は, 関東周縁機業地(前橋・足利など)が最も多く, 福島(川俣), 加越(金沢・福井)のほか, 米沢・京都などとなっている(愛知県教育会『愛知県地誌』, 1936年, 598~601ページ)。
- 15) 300日未満のものは, 器械製糸16.8%, 座繰製糸22.2%, 玉糸製糸15.5%。1けた・2けた日数の工場がめだつ(農林省蚕糸局『第十一次全国製糸工場調査』, 1929年)。
- 16) なお, 明治後期よりこのころ(1905~39年)まで, 豊橋市における製糸業の生産額(金額)は, 1~2年を除き, 全工業生産額に占める割合が50%をこえ,

- ときには80%をこえる高い割合を示していたが, 1940年以降は50%を切る(伊藤郷平『地方都市の研究——新しい豊橋——』, 1954年, 71~73ページ)。
- 17) 『愛知県蚕糸業史』前掲1), 292, 293ページ。
 - 18) 『愛知県蚕糸業史』前掲1), 290~295ページ。
『豊橋蚕糸の歩み』前掲1), 155~161ページ。
 - 19) 『豊橋蚕糸の歩み』前掲1), 159~160ページ。
 - 20) 『豊橋蚕糸の歩み』前掲1), 161ページ。
 - 21) 『愛知県統計書』
 - 22) 豊橋市戦災復興誌編纂委員会『豊橋市戦災復興誌』, 1958年, 60~67ページ。
 - 23) 毎日新聞「豊橋空襲」(下), 1971年7月9日。

3 戦後の製糸業と関連企業の現況

A 戦後の製糸業

戦災によって豊橋製糸業は全滅的被害を受けたが, 戦後における復興の状況のみよう。

【器械製糸と座繰製糸】 幸い, 焼失を免れた主要工場としては, 小黒製糸場, 三州石川組製糸場, 共栄組二川工場(以上器械製糸), 大林製糸所(玉糸製糸)などがあり, これらが困難な諸情勢のなかで先ず操業を再開している。しかし, 東海地区では, 戦後, 繭生産と製糸設備のアンバランスが深化し¹⁾, 愛知県においてとくにこの傾向が強く, 原料繭不足による操業の困難が続いた。そして朝鮮戦争による一時的な好況もあったが, 器械製糸の場合, 14工場まで復元していたものが, 漸次閉鎖するものが増え, 郡是製糸豊橋工場が1958年に²⁾, また翌59年には小黒製糸場, 翌々年に後藤製糸場と閉鎖が続く, 最後まで残った石川製糸場も65年に廃業して, 豊橋の器械製糸は消滅した³⁾。

座繰製糸は, 戦後, 東三河地区において84人, 508釜で再出発している。当時, 足踏座繰機が使用されていたが, 動力化が進み, 1949年から免許制となり, この器械座繰がいわゆる国用製糸と呼ばれるものである。しかし, その後は繭の入手難などから廃業するものも多く⁴⁾, 農林省農蚕園芸局繭糸課の名簿(国用器械製糸工場名簿⁵⁾)によれば, 近年のものであるが, 1974年, 豊橋市における免許工場数は35, 免許台(釜)数は251台(釜), そして80年には32, 247台(釜)となっているが, 操業の実態は不明である。

筆者が, 1977年11月に実施した全国の製糸工

場に対するアンケート調査⁶⁾において、豊橋市の国用製糸工場よりえた4通の回答のうち、3工場は既に休業（それぞれ1950年、55年、63年以降）しており、操業中の1工場（立花町）⁷⁾も、原料繭不足のため、近く休（廃）業せねばなるまいとの見通しを述べていたが、本年（83年）の現地聴取では、現在、操業中のものはわずか5業者のみで、先の立花町の業者も休業していた。

【玉糸製糸】 このように、豊橋における器械製糸工場は既に消滅し、国用製糸工場もまた、ほとんど壊滅状態であるが、玉糸製糸のみは、根強く残存して、玉糸製糸創始（小淵志ち）以来の伝統を維持している。

玉糸は、^よ節のある独特の風合いが好まれて、強い需要があり、海外への輸出も比較的多い。戦後間もない1948年に、農林省は輸出玉糸工場47を指定し、以後、55年まで毎年同様の指定を行ってその振興をはかったが、豊橋市では、大林製糸、浅井製糸、高橋製糸、糸徳製糸など数工場が指定されている。また1950年ころより、ジャンタン流行にともないアメリカからの玉糸の大量注文があり、これらが玉糸製糸復興のきっかけになっている⁸⁾。

戦後、豊橋の玉糸製糸は、幸い戦災を免れた大林・高橋・浅井・糸徳の4工場、約400釜の運転で始まっている。

その後工場は11工場（許可釜数651）まで回復するが⁹⁾、やがて8工場程度に落ち着き近年にいたった。その間、釜数は若干増えている。石油ショック以後さらに数工場が廃業して現在（1983年11月）は清水（血縁者2人の名義、実質1工場）・大林・高橋・浅井・小原の5製糸場（許可釜数762釜）が操業中である。最近10年間（1972、77、82年）の生糸生産高の推移を工場別に図1に示しておく。この間に4工場（いずれも零細個人企業）が閉鎖している。10年間に玉糸の全生産高は121.7kg→63.3kg→65.6kgと推移しており、石油ショック以後の減退がめだつが、最近はやや持ち直した感じである。

このうちの大林製糸所について触れておく。当工場は国鉄豊橋駅の南500mの地点にあっ

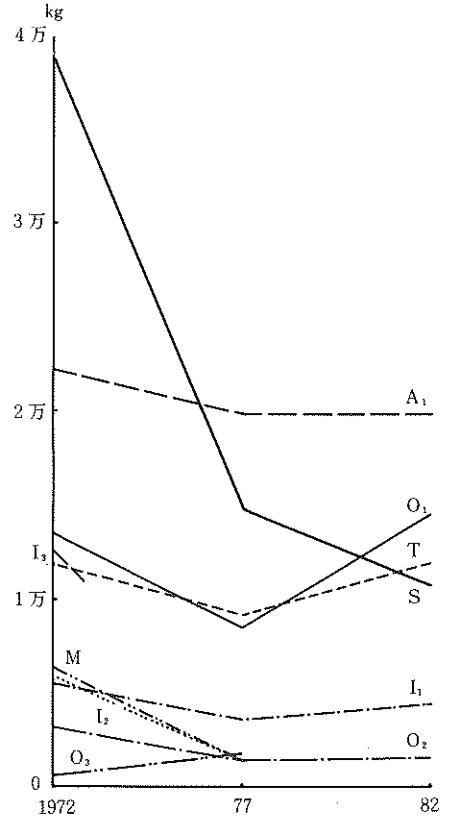


図1 玉糸生産の現況

工場別。三州玉糸生糸協同組合資料により作成。

て、豊橋玉糸製糸発展の功労者大林宇吉の手によって1888（明治21）年に創建されたものであり、現在残る玉糸製糸場のなかでは最も古く、また最大規模のものである。約2,600坪の敷地に繰糸場、倉庫など1,060坪（建坪）が立地している。釜数226（許可）、従業員は62人である。かつては4,800坪の敷地であったが、譲渡、また新幹線の用地買収などによってほぼ半減している。3代目の若い当主が、繰糸機の改良に取り組むなど、意欲的な経営が目されている（写真1）。

しかし、全体を通じて、原料不足（輸入依存度が高い）¹⁰⁾、合理化の困難性（普通生糸のように自動化による省力化が難しい）など問題点が多く、今後の見通しは暗い¹¹⁾。

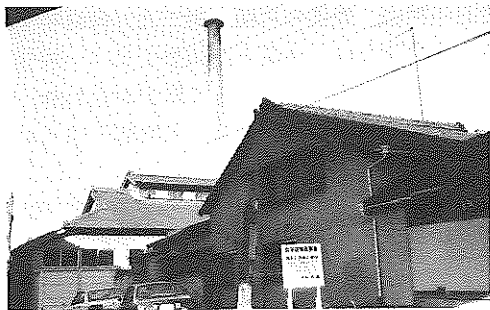


写真1 大林製糸所 花中町。1984年1月20日撮影。

B シルク関連企業の分布・現況

図2は、現在、操業中の製糸工場（国用製糸と玉糸製糸工場）のほか、シルク関連の特絹糸（絹紡）工場や繭問屋、生糸・副蚕糸などの販売業者、関係機関などの分布を町別に示したものである。

これらは、ほとんどが市街地中心部付近に位置している。ここでは、とくに特絹糸工業と繭

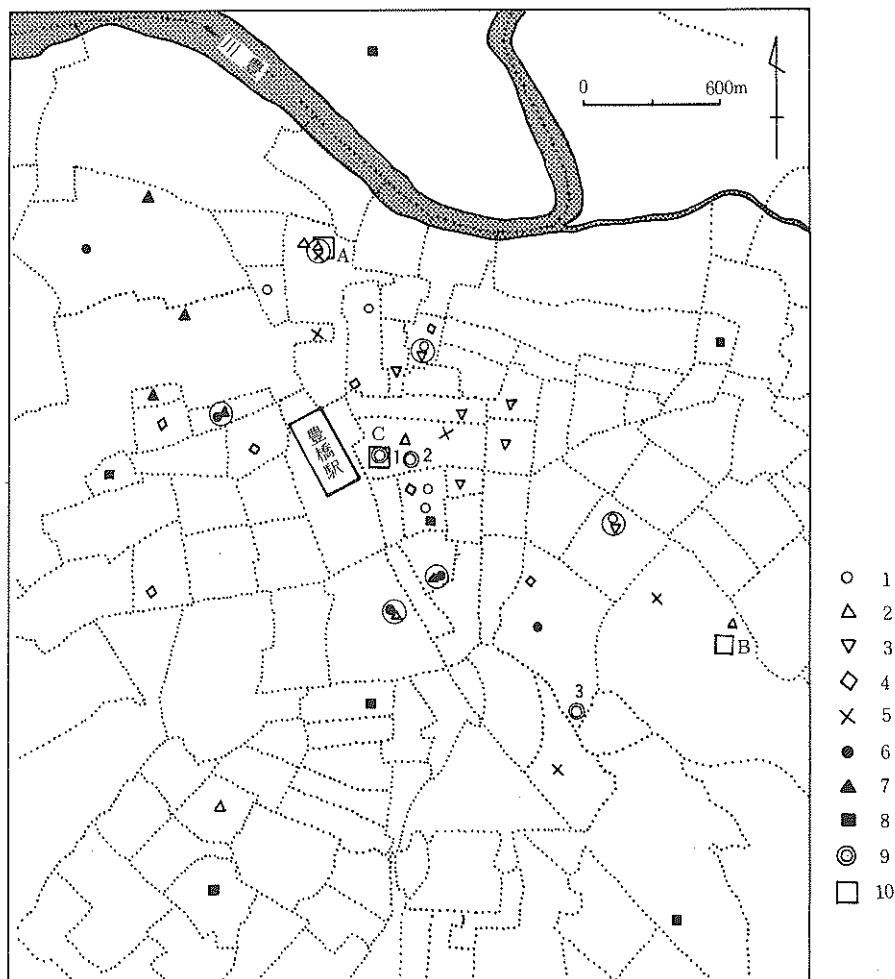


図2 豊橋市中心部におけるシルク関連業者・企業等の分布(町別, 1983年)

1: 繭取引商, 2: 乾繭取引所会員, 3: 同商品取引員, 4: 生糸商・副蚕糸商, 5: 乾繭取引所指定倉庫(会社), 6: 玉糸製糸工場, 7: 国用製糸工場, 8: 特絹糸工場, 9: 1-三州玉糸生糸組合, 2-豊橋乾繭取引所, 3-豊橋繭検定所, 10: 工場跡地調査地点 (A-清水製糸池田工場, B-石川組製糸所, C-三州玉糸生糸組合)。大きな円で囲んだものは同一業者。表示されていないもの国用製糸工場1(向草間町), 特絹糸工場1(二川町), 工場跡地調査地点1(大岩町)。豊橋商工名鑑(昭.58版), 豊橋乾繭取引所月報(昭.58, 5月号)のほか聴取による。

取引業を取り上げて述べることにする。

【特絹糸工場】 特絹糸工場はいずれも戦後創設のものである。桑蚕屑や柞蚕屑(主に前者)を使い、絹紡(短繊維)を行う中小工場であるが、このような工場は全国に10数工場あるといわれ、そのうち8工場が豊橋市内に分布している。1960年代後半から70年代前半ころに特絹糸製造を始めたものが多い。

筆者がたずねた K 工場¹²⁾(下地町)は、1950年の創業で、ガラ紡などを経て65年に特絹糸に切り替えている。500坪の敷地に350坪(建坪)の工場、カード5、整紡機5などの諸設備をもち、25(うち女子20)人を雇用している。原料は中国産のものが主であるが、年によって変動があり、北朝鮮・ソ連産も多い。国内原料は2割程度である。桑蚕屑80%、柞蚕屑20%となっている。1982年には210t余を使用している。

製品は885デニールのものが中心で、国内向が8割、残り2割は輸出している。最近、輸出向が増えつつある。従来、和服(紬)用が主であったが、近年はセーター用が多いという。

沈滞色の強い製糸工場に比べ、特絹糸工場は新興企業らしく活気が満ちているようにみえる。ただ、輸入規制(一元輸入制)を受けないとはいえ、原料の多くを外国(社会主義国)に依存していることに若干不安が残るのである。

【乾繭取引所】 豊橋は、わが国有数の繭の集散地として知られているが、取引の中心は乾繭取引所(駅前大通)である(写真2)。

豊橋乾繭取引所¹³⁾は、第一次が1934年の設立



写真2 豊橋乾繭取引所
駅前大通2丁目。1983年7月21日撮影。

で41年閉鎖、戦後の再開(第二次)は51年である。取引所では、会員と商品取引員(一般の人びとはこれに委託)によって取引が行われ、実物取引と先物取引とがあり、先物取引は6か月限となっている。

立会は、単一約定値段による競争売買で、板寄せ式という方法で行われている。取引標準品は、繭検定規則による繭格2等生糸量40%のもの、呼値は1kg、1円単位、売買数量・受渡数量単位はいずれも1枚(300kg)である。毎日、前場2回、後場2回の立会が実施されている。

開所以来(1951~82年度)の出来高は、14,627,

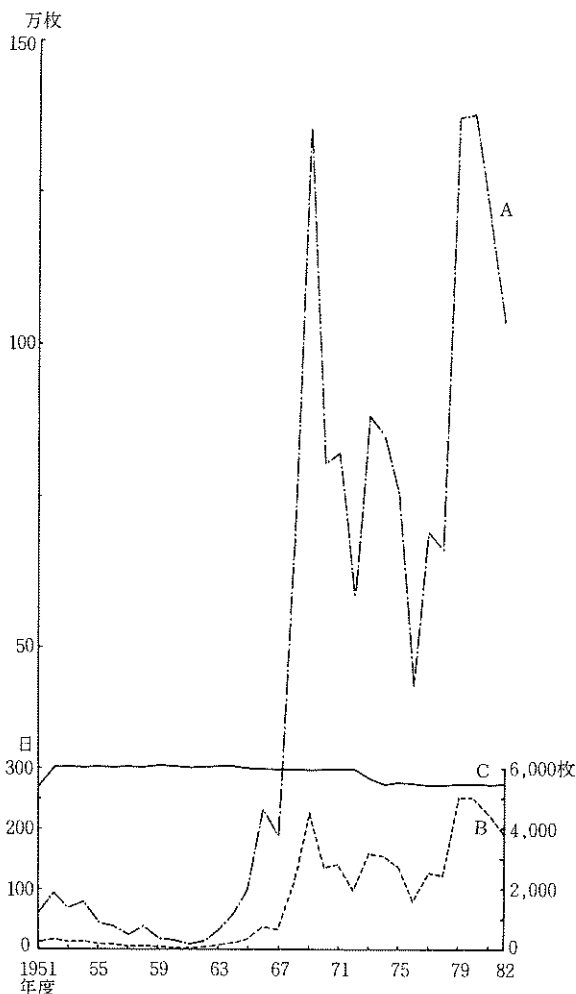


図3 乾繭取引所における出来高と立会日数(年度別)

A: 出来高, B: 1日当出来高平均, C: 立会日数, 1枚=300kg。豊橋乾繭取引所月報(図2参照)。

315枚で、年平均は457,104枚となっている。立会日数は延9,304日で、年平均291日であるが、設立当初は300日をこえており、漸減の傾向にある。ただ、出来高は増えてきている(図3)。

近年の取引繭は輸入繭がほとんどで9割程度を占めるが、中国産が多く、ほかでは韓国産、ブラジル産などがめだっている。市内のほか蒲郡、一宮、名古屋各市に指定倉庫があって、取引繭の保管や受渡が行われている。豊橋市内では、丸中清水倉庫、蚕糸倉庫、マルケイ倉庫、日本通運豊橋支店、東三河養蚕農協連の5社が指定されている。

なお、現在(1983年5月)、会員26名のうち市内業者は6、商品取引員24名中、同じく市内に7業者がみられる。

【繭問屋】 豊橋製糸業の発展は繭問屋に負うところが大きい。かつては「ぼてふり(棒手振)」と呼ばれる売買行商人が養蚕農家と製糸家の仲介役を果たしていたが、やがて繭取引は繭問屋の手へと移って行く¹⁴⁾。

豊橋の繭問屋の起りこは、1887(明治20)年にさかのぼり、札木町の「蚕糸周旋商店」が嚆矢とされている。その2~3年後から問屋も増え、製糸家の発展とともにいっそう繁栄し、とくに玉糸製造の勃興と躍進は、玉繭の全国的規模での吸収のほか、遠く朝鮮・中国からの輸入をももたらし、業界の活動を活発にした。さらに大正期に入ると、第一次世界大戦当時の好況の波にのってその隆盛は極に達し、1916(大正5)年には東三繭糸問屋同業組合が設立されている。昭和の不況期に入っても、問屋の基礎は強固で、32(昭和7)年当時、豊橋市およびその付近における繭問屋は51業者を数え、とくに本町、萱町のほか札木町など当時の中心商店街付近に多くみられた¹⁵⁾。

しかし、やがて特約取引の普及¹⁶⁾や戦争の激化とともに取扱高も漸減し、1941(昭和16)年には、組合も愛知県繭売買蚕糸商共同施設組合(生糸問屋は三河生糸問屋蚕糸商共同施設組合)として新発足するが、各自店舗は閉鎖し、駅前大通りの組合事務所でも事業も継続することになる¹⁷⁾。戦後は、豊橋繭問屋協同組合を設立し

たが¹⁸⁾、現在は事実上解散状態にある。

戦後の状況を小栗商店¹⁹⁾の場合についてみよう。当商店は、業界でも最も早い1887(明治20)年ころに創業、以後、今日まで繭仲買を続けているが、第二次大戦中は、施設組合の設置によって個人営業は休止、組合勤務のサラリーマンの形で各地へ出張して繭購入に当たり、終戦直後の1年ほどは疎開先の二川町で農業に従事し、施設組合解散後1946年に事業を再開している。55年ころが戦後の最盛期で、このころは月25~30t(乾繭重量)の取引を行い、西は岐阜・三重・京都・兵庫・岡山・高知の府県、東は山梨・神奈川・埼玉・群馬・茨城・福島諸県から購入し、豊橋市内の各工場へ販売したが、県外(京都・山梨・群馬)工場へ売ること多かった。最近では岐阜・三重・京都・鳥取・島根・高知・山梨・埼玉・群馬・茨城と取引範囲もやや狭まり、取引高にいたっては10分の1程度に激減している。また、繭も、以前は本繭・屑繭(玉繭・選除繭等)ともに扱っていたが、今は玉繭主体となり、輸送手段も貨車→トラックへ変わった。生繭の扱いは少ない。電話注文が主となっている(戦前は出張購入が多かった²⁰⁾)。

なお、今日における業者の分布は、先の図にみるように市の中心部付近に散在しており、往時のような中心商店街への集中的傾向はみられない。これは生糸問屋についても同様である。

1) 大迫輝通『繭地盤—繭取引と流通の構造—』古今書院、1979年、40~44ページ。

2) 『グンゼ株式会社八十年史』、年表、1978年。

3) 愛知県農業水産部園芸蚕課『製糸工場台帳』。

4) 『製糸工場台帳』(前掲3)によれば、廃業しているもの60業者。1965年ころと71年ころの廃業が多い。

5) 「昭和49年7月31日現在」と「昭和55年9月30日現在」のもの。

6) 総集計については、拙著『繭地盤—繭取引と流通の構造—』前掲1)参照(82~103ページ)。

7) 個人経営。自動機1、普通機1。家族2人、雇用4人の6人が従事。

輸入乾繭22t(1976年)を使用。

8) 『蚕糸年鑑』、1954年版、74~77ページ。

『愛知県蚕糸業史』、329~332ページ。

『豊橋蚕糸の歩み』、186ページ。

9) 農林省蚕糸局「玉糸製造業者名簿」、全国輸出玉糸協同組合、昭和31年6月末日現在。

10) 中国、台湾、韓国、中近東などの産繭輸入が多い。

11) 戦前数多くあった製糸工場のその後について、

- 1954年の調査(前職調査)では、317工場のうち37(紡織31, 機械工業3, 食料品工業2, 木材工業1)が製糸を前職としているが、やはり、同じ繊維関係への転業が多い(伊藤郷平『地方都市の研究——新しい豊橋——, 84ページ)。
- 12) 鈴木源吉氏(金伴繊維株式会社取締役)より聴取。
- 13) 以下の記述は、次の資料のほか、中村嘉明氏(取引所理事)の御教示をえた。
『豊橋乾繭取引所二十年史』, 年表, 豊橋乾繭取引所, 1971年。
『愛知県蚕糸業史』, 398~408ページ。
『豊橋乾繭取引所月報』, 昭和58年5月号。
その他パンフ。
- 14) 『愛知県蚕糸業史』, 264ページ。
- 15) 『愛知県蚕糸業史』, 356~361ページ。
『地方都市の研究——新しい豊橋——, 43~44ページ。
- 16) 大迫輝通『繭地盤——繭取引と流通の構造——, 古今書院, 1979年, 57~61, 105~111ページ。
特約取引の普及が繭市場の衰退を促した。
- 17) 空襲で焼失後、互町へ移転, 1946年まで続く。
- 18) 『愛知県蚕糸業史』, 359~360ページ。
- 19) 小栗直一氏より聴取。
- 20) 1935(昭和10)年ころ最大。当時、店員数名を置き、月20~30万貫を扱ったという。

4 蚕糸業と土地利用

以上、豊橋製糸業の推移と現況、またシルク関連企業などについて延べたが、ここで視点を変え、土地利用の面から豊橋の蚕糸業についてみようと思う。まず、かつて繁栄した製糸工場の跡地は、現在、どうなっているか。また、かつて農地利用のうえに大きな割合を占めた桑園については、今日、どうであろうか。この2点から考察しよう。

A 製糸工場跡地の利用状況

豊橋製糸業は戦災を機にほとんど壊滅した。戦後の復興は玉糸製糸が主となっているが、し

かし、それも、今日ではわずか5工場(名儀は6)にすぎない。昭和初期に数えた260余工場(10釜以上, 表2参照)は、今日、ほとんどその姿をとどめていないが、当時の主要工場は、現在、どのようになっているであろうか。その跡地の利用状況についてみよう。ここで取り上げたのは、清水製糸池田工場、三州石川組製糸所、糸徳製糸本工場の3工場と玉糸生糸協同組合の跡地である。

豫め3工場の昭和初期における規模・経営内容などを表6に示しておく。

【清水製糸池田工場】 清水製糸は清水熊太郎が1900(明治33)年、渥美郡神戸村(現在、田原町神戸)に創設、14(大正3)年、豊橋に進出(西松山町)して松山工場¹⁾を開設、10年後の24(大正13)年には第3工場である池田工場を建設して操業を開始し、個人企業としては豊橋最大の製糸場であった²⁾。

第十一次全国製糸工場調査(1927年度)によれば、神戸工場は、205釜、職工数224人、玉糸2,275貫を製造し、松山工場は224釜、261人、同じく玉糸2,283貫を生産する中規模工場である。池田工場は創業主熊太郎が、大工場建設の夢をかけ、12,000坪の用地を買収して建設したもので、1927(昭和2)年当時、設備では石川組製糸所に次ぐが、工場規模(敷地面積・建坪等)では最大であり、また表にみるように、新鋭工場で生産性に優れていた。

しかし、その後、工場はさらに拡張されて1930(昭和5)年には、設備釜数688釜、使用人950人に増えており³⁾、このころは豊橋最大の工場であったことは疑いない。

先の表では、使用繭30万貫となっているが、

表6 工場の規模と営業内容

工場名	設備釜数	使用釜数	緒数	職工数(うち女)	繭使用高	生糸生産数量(うち輸出)	屑物高	作業日数	起業年月	備考
清水製糸池田工場	491	456	420,000	612 ^人 (540)	300,000 ^貫	31,500 ^貫 (30,000)	5,850 ^貫	346 ^日	1924 (大・13)	器械製糸
石川組製糸所	523	500	713,000	701 (640)	180,000	18,400 (18,400)	2,700	310	1918 (大・7)	器械製糸
糸徳製糸本工場	386	不明	不明	465 (413)	199,861	玉糸20,690 (不明)	7,740	333	1879 (明・12)	玉糸製糸

昭和2年度。「第十一次全国製糸工場調査」による。

大正末ころの購繭は、愛知県下のほか、九州一円から鳥取・岡山・兵庫・滋賀・奈良・岐阜の広範囲(主として西日本)にわたっている⁴⁾。また従業員出身地⁵⁾は愛知県を中心に、静岡・岐阜・三重から京都・福井・富山に及んでいるが、昭和期に入り、飯田市の閉鎖工場の従業員を雇用することなどがあって、長野県出身者が増えている。

恐慌後、池田工場はさらに規模を拡大して、1931(昭和6)年以降、844釜を整備し、従業員は1,200人近くにまで増えたが、生糸価格の低落にたえられず、2か月の休業の後、1933~37(昭和8~12)年の約4年間は共立社(株式会社)の名で共同経営となった。しかし、その間に負債株全部を買い戻して自立するのであるが、やがて太平洋戦争となり、1942(昭和17)年に13工場が企業合同(工場名は清水製糸池田工場)し、翌43(昭和18)年には軍需工場へ転換のため住友金属に買収されることになって、64棟、延5,716坪の建物のうち住宅(5棟、1,044坪余)を除くすべてを譲渡するのである⁶⁾。空襲による工場の焼失は、そのほぼ1年半後である。

図4はかつての池田工場の平面図と現状を比較したものである。工場は建設当時のものであるが、その後、若干の増設があった模様である。買取時には、大小工場合わせて29棟、3,093坪、倉庫3棟、708坪、事務所121坪、寄宿舍7棟、535坪(いずれも床面積)などがあった⁷⁾。

終戦後は、焼残った鉄筋コンクリート造の倉庫2棟⁸⁾を借用して倉庫業(丸中清水倉庫株式会社)を開始、順調に発展して今日にいたって

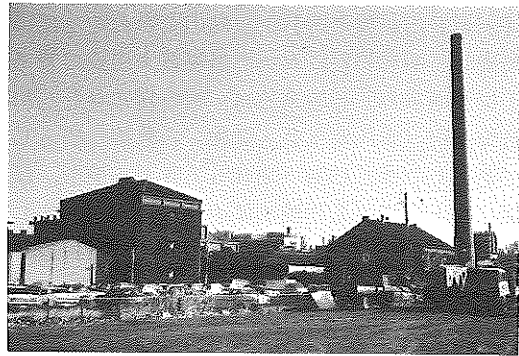


写真3 清水製糸池田工場跡地の現況-大煙突と倉庫
大橋通。1983年1月20日撮影。

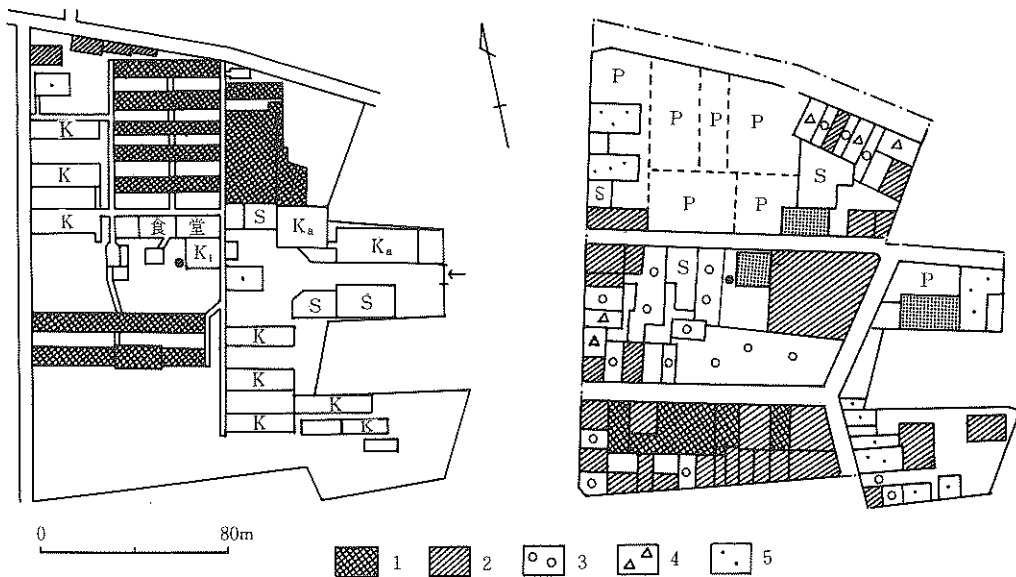


図4 清水製糸池田工場と跡地の現況

工場(左図)は大正末期。1:工場, 2:住宅(含アパート), 3:商店, 4:飲食店等, 5:その他。
P:駐車場, K:寄宿舍, K_a:乾燥室, K_i:汽罐室, S:倉庫, 黒くつぶした建物は、現存する製糸の建物、黒点は煙突。清水熊太郎氏・住宅地図による。

いる⁹⁾。

戦後の区画整理を機に、土地の多くは道路や駐車場、また住宅・商店などに転用されている。製糸工場の面影を残すものとしては、焼失を免れた繭倉庫二棟と汽罐室1棟があって、その暗灰色のコンクリートの高い建物が周辺のそれとは対照的で、そばに佇立する大煙突とともに盛時をしるのぼせるのである(写真3)。

倉庫は、乾繭取引所の指定を受け、乾繭の保管を行っているが、繭量は漸減の傾向という¹⁰⁾。

【三州石川組製糸所】 向山町の台地上部に位置し、昭和初期において豊橋最大規模の製糸工場であった。当製糸所は、始め株式会社石川組製糸所(本店埼玉県入間郡)の豊橋支店として発足したが、1931(昭和6)年ころ解散、以後はもと工場長石川蹟次郎の個人経営工場として再出発した。先の表によれば、当時(1927年ころ)、設備釜数は500釜余、職工数701人、18,400貫の輸出用生糸を生産していた。

戦争中は統制会社の豊橋工場として、事業を継続し、また戦災に会うこともなく、戦後をむかえている。豊橋市最後の器械製糸工場として、1965年8月まで操業を続けて廃業したことについては既述したが、その後68年にポーリング場へ転換し、75年にはこれをユニー(ユニー向山

店)へ賃貸している。

図5によって、往時の製糸工場と跡地の現状をみよう。敷地面積は7,832坪、工場建坪は2,735坪であった。繰糸工場は4棟、再繰工場2棟、女子寮2棟、それに織布工場が2棟で、これらがいずれも南北に並列していた(その後、倉庫や住宅の増設があった)。

1968年に、これらは倉庫・住宅などを残してすべて毀され、ポーリング場(2,573坪)が建設されたが、75年には、その建物がそのままスーパーに転用(賃貸)されて今日にいたっている。その売場面積は1,755坪、駐車場の収容台数は500台となっている(写真4)。

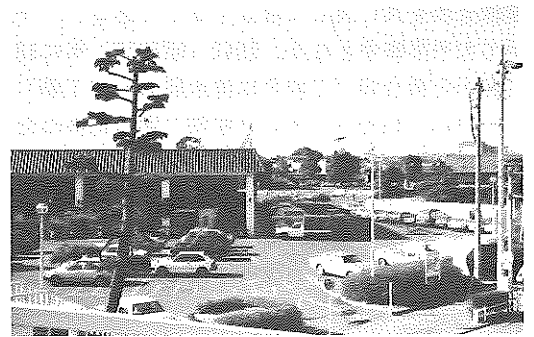


写真4 三州石川組製糸所跡地のスーパー
向山町。1984年1月20日撮影。

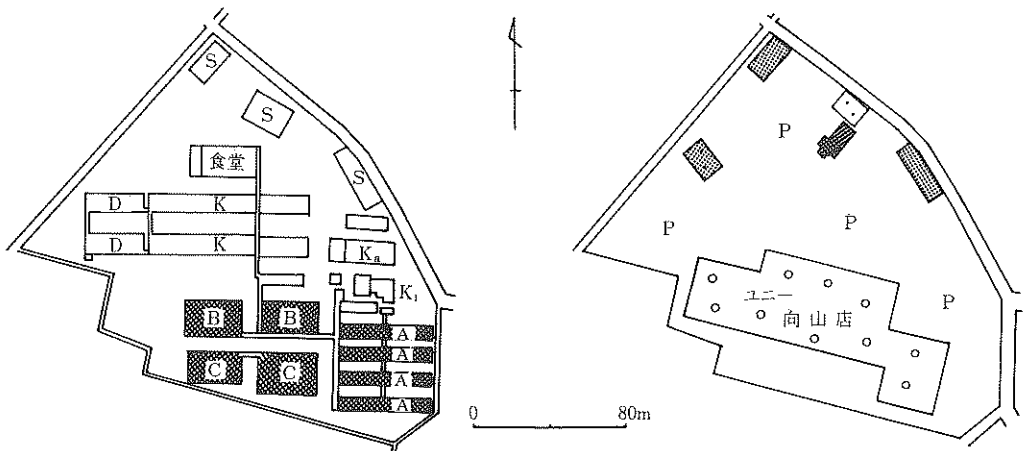


図5 石川組製糸所と跡地の現状

左図が工場(戦前)。A:繰糸工場, B:再繰工場, C:織物工場, D:講堂。その他は図4と同じ。
黒くつぶした建物は現存する製糸の建物。

【糸徳製糸本工場】 1879(明治12)年、二川町(当時、渥美郡、55年に豊橋市編入)に設立された糸徳製糸工場は、既述のように、玉糸製糸の創始者小淵志ちの手になるもので、豊橋市では最古の工場であった。

その後、1918(大正7)年に第二工場が同じく二川町に、第三工場が1925(大正14)年、東田町に設置され、いずれも糸徳工場として発展した。第二工場は189釜、職工数250人、玉糸産額は8,154貫、また第三工場は120釜、120人、3,045貫を生産し、規模は本工場の2分の1、3分の1程度であった¹¹⁾。ただ、工場敷地に関しては第二工場が最大で、第一(本)工場が3,466坪であるのに対し、第二工場は4,483坪あり、第三工場は1,550坪であった。

図6は本工場のものである。工場は、旧東海道(二川町は旧二川宿)北側緩斜面の南北に細長い敷地に、工場(3棟、第1~第5工場)、寄宿舎(3棟)のほか再練場、撰繭場・学校・病

室などが並列していた。

ところで、工場は1958年に閉鎖されたが、跡地は、現在(図には跡地周辺も含めて示した)、その西半は市役所窓口センター、電話交換局、郵便局などの公共施設に変わっているが、東半は一部が住宅や駐車場になっているほかは空き地が広く残り、まだ十分な転用がなされていない。

電話局の東側に、東西に細長くのびる瓦葺きの古い二階家(現在、後藤工場)は、かつての寄宿舎の一部を工場に転用したもので、往時をしのばせている。

図から外れるが、北端の小川(宮川)の北側に、小淵志ちの子孫(3代目)の経営する幼稚園がある。建坪1,000坪、定員600人の大規模なものであるが、幼稚園は既に戦前(1940年)から空いている寄宿舎を利用して付設されており、工場閉鎖後は、いわばこれが主業となったものである。現在地のもは、工場閉鎖後、山林を開いて新設されている。

【三州玉糸生糸協同組合】 三州玉糸生糸共同組合は、既に触れたように、1901(明治34)年、大林宇吉等の盡力によって設立(三遠玉糸製造同業組合)されて以来、80年余の歴史をもつが、その間、強固な組織力と指導層の適切な措置によって幾多の危機を切り抜け、豊橋玉糸の日本的地位を保持してきた¹²⁾。現在は、会員数4(他に準会員3)¹³⁾で、駅前大通り(1丁目)の一等地に敷地260坪と12坪のささやかな事務所をかまえるにすぎないが、しかし、かつては現在地を中心に約3,000坪の用地と工場(試験びき)や繭倉庫、寄宿舎(試験工女用)などの諸施設を保有しており、戦災による焼失直前ころには、工場3棟延290坪(平屋、各200、15、75坪)、寄宿舎1棟(3階建)延416坪、倉庫1棟(2階建)延20坪、事務所1棟(2階建)延149坪のほか、居宅1棟(2階建)108坪、湯殿22坪などがあった¹⁴⁾。

これらは、1945年6月の大空襲ですべて焼失し、また、戦後の区画整理事業で、土地も10分の1以下に縮小してしまった。図7は、かつての敷地跡の現状を示したものであるが、商店・

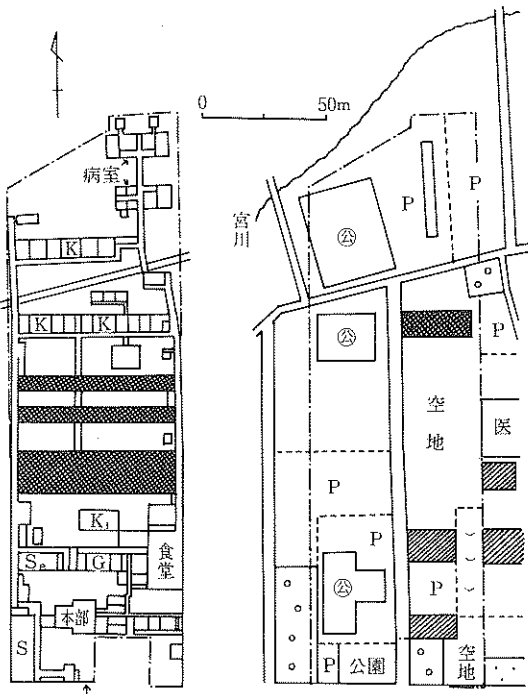


図6 糸徳製糸本工場と跡地の現状

工場(左図)は1928年当時。S.: 養蠶場、G.: 学校、⊙: 公共施設(北から郵便局、電話交換局、市窓口センター)、その他は図4と同じ。二川学園資料、住宅地図のほか現地踏査による。

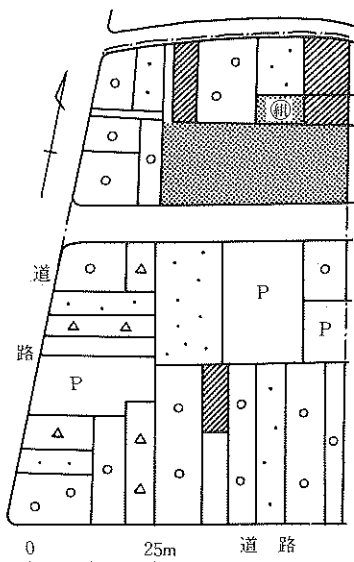


図7 旧玉糸組合用地の現状

黒くつぶした部分が現在の敷地（◎は組合事務所），
その他の要領は図4と同じ。住宅地図と聴取による。

旅館・駐車場などに転用されている。現在の所有地も、大部分は駐車場として使用されている。

残念ながら、戦災以前の平面図はこれを欠いている。

B 桑園の推移と現況

かつて豊橋の市街地周辺には広大な桑園が分布し、一大養蚕地域を形成していた。しかし、現在、それらは完全に消滅して、われわれはこれを見ることはできない。

豊橋市における桑園分布の推移、そしてその

後の利用の状況などについて述べよう。

【桑園の推移】 豊橋製糸業の発展は、いうまでもなく、付近農村地域の養蚕の隆盛に負うところが大きい¹⁵⁾。往時、愛知県は全国屈指の養蚕県であり¹⁶⁾、とくに豊川流域から渥美半島にかけてはその中心地域をなしていた。

養蚕最盛時のころ(1929年)¹⁷⁾、この地域には、12,306.9町歩の桑園があり、耕地面積の4割以上(40.3%、愛知県は23.4%)を占めていた。とくに豊川流域では、河口付近を除き、5割、ところによっては6割以上が桑園になっており、流域の自然堤防上や段丘上面に広く分布していた¹⁸⁾。

豊橋市についてみると、当時、市内における桑園面積は169.3町歩で、耕地の約5分の1(桑園率21.6%)を占めていた。

表7によって、豊橋市における桑園(養蚕)の推移についてみよう。1930(昭和5)年の恐慌期までは漸減している。桑園の減少とともに養蚕戸数も減っているが、収繭量は、生産性の向上を反映して増大している。恐慌期にいたるまで、全国的な桑園拡大の傾向のなかで、豊橋市の桑園面積が減っているのは、狭隘な市域(このころの市域面積は、15.49km²)のなかでの人口増加にともなう市街化進展によるものと考えられる。1932(昭和7)年に付近の5町村(うち1村はその一部)が編入され、市域は一気に7.5倍(115.89km²)へ拡大するが、それにもなつて桑園面積も表にみるように増えている。とくに高師村(渥美郡)と下川村(八名郡)の

表7 豊橋市の養蚕

	1910 (明・43)	1920 (大・9)	1930 (昭・5)	1940 (昭・15)	1950	1960	1970	1975('80)
桑園面積	210.6ha (212.4町)	169.2 (170.6)	167.9 (169.3)	1,111.4 (1,120.7)	11.2 (11.3)	12.2 (12.3)	17.3	4 (-)
養蚕戸数	春蚕 578戸 夏蚕 372 秋蚕 407	463	402	1,823	268	396	46	6 (-)
収繭量	53,737.5kg (1,433)石	92,887.5 (2,477)	97,683.8 (26,049)貫	869,381.3 (231,835)	35,846.3 (9,559)	63,612	7,446	761 (-)

かっこ内の数字は旧単位による統計数字。1932(昭・7)年と1955(昭・30)年に町村編入(15.49→115.89→253.38km²)。愛知県統計書(1910,'20,'30,'40)、同統計年鑑(1950,'60,'70)、蚕糸業の現状(1975,'80)による。

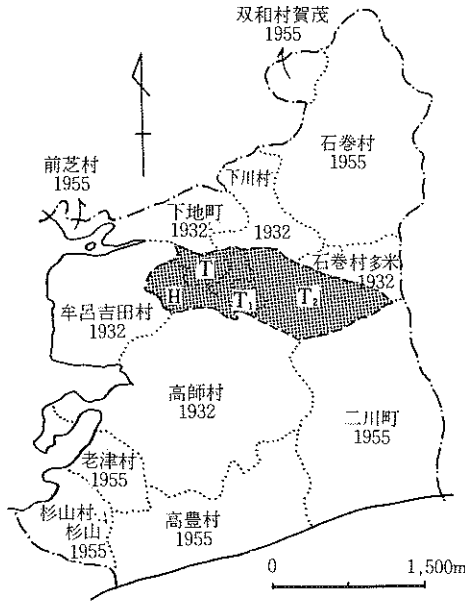


図8 豊橋市域の拡大

黒くつぶした部分が1906(明治39)年市制施行当時の市域。T:豊橋町、T₁:豊橋村(明治28前編入)、T₂:豊岡村(明治39年編入、同時に市制施行)、H:花田村(同)。記入の年代は編入年。

編入¹⁹⁾によって大きく増えた(図8)。

第二次世界大戦を挟んだ1940~50年の間に、桑園は10分の1に激減する。55年の2度(3月1日、4月1日)にわたる町村編入によって、市域はさらに2.2倍近く拡大し、ほぼ今日の面積となったが、桑園面積については大差なく、その後はさらに減少して、今日では皆無となっている。

ところで、現在、豊橋市には市域面積の29%余を占める7,510haの経営耕地(水田と畑地の比率1:1.4)があって²⁰⁾、市街地周辺には、豊かな水田や畑地・果樹園が広がり、田園都市的性格が強い。そして、豊橋市は、温暖な気候と東西の大消費地のほぼ中間に位置する恵まれた立地条件に加えて、豊川用水の通水(1968年)にともなう畑地灌漑施設、土地基盤整備の進展と技術導入によって近代的な農業地帯へと発展しつつあり、とくに、農業構造改善事業、高能率生産団地、水田再編対策事業等との関連から、作付体系の改善がはかられ、農業新興地域整備計画をはじめとした土地の有効利用計画をもと

に、園芸・畜産・果樹等総合的な高度土地利用が進んでいる²¹⁾。

このような背景のもとにある豊橋市の農業の実態を、現地についてみることにする。

【土地利用の現況——豊橋市北部と南部の農業】 かつて桑園の卓越地域であった豊橋市街地北郊と南郊の旧石巻村と旧高豊村(図8参照)を取り上げ、その農業土地利用について対比してみよう。戦前、養蚕最盛時には、石巻村は桑園率46.5%、また高豊村は44.5%、桑園度(樹園地を含む畑地面積に対する桑園面積の割合)については前者が83.0%、後者は78.1%という養蚕地帯であったが²²⁾、今日では、それぞれ果樹(柿)地帯、蔬菜園芸地帯として知られている。

表8によってみよう。世界農林業センサスによって最近20年間の推移を示したものである。耕地は都市化進展にともない漸減の傾向にあり、その水田と畑地の比率は、現在、石巻村が2:3、高豊村が3:7で、いずれも畑地が占めている。わずかずつではあるが、畑地の比率が増えてきている。

桑園は、現在、両村ともに消滅している²³⁾。高豊村では、既に戦後間もないころになくなって²⁴⁾。桑園に代わって増えたのが、石巻村では果樹(柿)、高豊村では野菜類や工芸作物(たばこ)である。

石巻村の場合、1980年における果樹園率(耕地面積に対する果樹園面積の割合)は46.8%で、かつての桑園率(1927年、46.5%)とほぼ同率となっており、桑園跡がほぼそのまま果樹園へと転換していることがうかがわれる。そのうち柿園は356haで樹園地の88%余を占めている。1968年に豊川用水が完成したが、これが果樹園化をいっそう促進し、山林開墾による拡大も行われている²⁵⁾。豊川左岸の段丘・台地の上部一帯が柿園となっている。

次に、天白台地上面であって遠州灘に面する高豊村は、いわゆる渥美の表浜農業地域²⁶⁾の一部をなし、現在は蔬菜園芸が中心となっているが、かつては桑園が卓越していた。それが戦中・戦後に食糧畑、とくに甘藷畑に転換したが、

表8 豊橋近郊の農業

	旧 石 巻 村			旧 高 豊 村		
	1960	'70	'80	1960	'70	'80
経営耕地面積	1,069ha	955	861	823	1,002	909
水田：畑 ^{※1}	42：58	44：56	40：60	34：66	34：66	30：70
桑園面積	49ha	11	0	—	—	—
果樹園面積	227	330	403	5	47	33
収穫面積	1,508	660	434	1,606	1,244	959
うち 稲	433	410	324	269	338	199
野菜類 (施設) ^{※2}	132	101	84 (6)	226	695	487 (35)
工芸農作物	17	3	0	39	111	138
飼料用作物	27	15	14	29	82	129
農家戸数	1,287戸	1,207	1,138	673	617	563
養蚕戸数	174	46	—	—	—	—

※1：畑は樹園地を含む。※2：ハウスおよびガラス室。両村とも1955年3月1日豊橋市編入。各年とも世界農林業センサスによる。

その後、野菜畑が増え、豊川用水が完成してからはさらに野菜類は急増して今日にいたった²⁷⁾。キャベツ・だいこん・すいかなどが多い。ハウス・ガラス室²⁸⁾の施設園芸も増えつつあって、これはトマト・すいか・マスクメロンなどが主となっている。そのほか、たばこ・牧草畑(乳牛)も漸増してきている(写真5)。

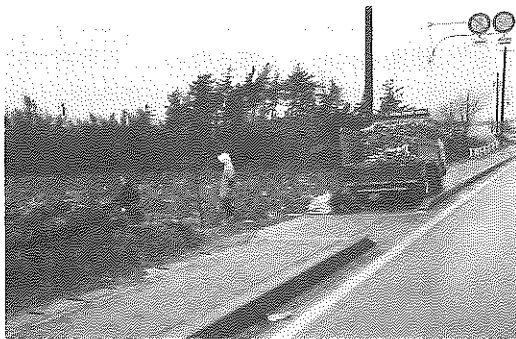


写真5 だいこんの出荷
高塚町(旧高豊村高塚)。1983年12月22日撮影。

農産物販売金額1位の農家数をみると²⁹⁾、石巻村では果樹園が54.7%、高豊村では野菜類37.1%で、施設園芸と合わせれば58.5%となり、これらが農業の中心をなしていることは明確である。高豊村では、1980年の専業農家が59.5%の高率を示している。

- 1) 伊藤製糸場を買収。
- 2) 池田工場は清水熊太郎、神戸工場・松山工場はともに弟(清水実次、同寿一)名義(『第十一次全国製糸工場調査』農林省蚕糸局、1927年度実態)。
- 3) 清水余慶会『清水熊太郎伝』、1961年、124~128ページ。
- 4) 1925(大正14)年の原料繭仕上出張先(『清水熊太郎伝』、102~104ページ)。
- 5) 『清水熊太郎伝』、115~117ページ。
- 6) 『清水熊太郎伝』、135~209ページ。
- 7) 『清水熊太郎伝』、202~206ページ。
- 8) 3階建と4階建、延591坪余。
- 9) 初代社長熊太郎。現在は4男志郎。
- 10) なお、松山工場は戦中一時閉鎖、戦災で焼失したが、戦後再建、現在にいたっている。神戸工場は今はない。
- 11) 『第十一次全国製糸工場調査』、1927(昭和2)年度。
- 12) 『地方都市の研究——新しい豊橋——』、80ページ。
- 13) 田原町の準会員1を除き、他は市内業者。
- 14) 1944年6月14日付、豊橋税務署長への施設申告書(組合所蔵)による。
- 15) 『豊橋市史』、532~536ページ。
『豊橋蚕糸の歩み』、75~104ページ。
『地方都市の研究——新しい豊橋——』、77~78、84~85ページ。
- 16) 養蚕最盛期(1930年、取引量最大)において、愛知県は全国道府県中、長野・群馬に次いで第3位(22,918.2t)(農林省農林経済局統計調査部『養蚕果年統計表』、1961年)。
- 17) この年、愛知県の桑園面積は最大(内閣統計局『農業調査結果報告』、昭和四年)。
- 18) 豊橋市(桑園面積169.3町)、南設楽郡(1450.1町)、宝飯郡(3657.7町)、渥美郡(4759.2町)、八名郡(2270.6町)の1市4郡、桑園率(耕地面積に対する桑園面積の割合)60%以上をみると、新城町(南設楽郡)66.8%、大野町(八名郡)71.2%、大和村(同)64.3%、三上村(同)68.1%(『農業調査結果報告』、前

- 掲17)。
- 19) 桑園面積高師村697.7町、下川村356.6町(『農業調査結果報告』)。
- 20) 1980年世界農林業センサス。畑地は樹園地を含む。
- 21) 『豊橋 82/市勢要覽』
- 22) 『農業調査結果報告』, 昭和四年。
- 23) 1980年, 旧石巻村の「0」は, 表示単位 (ha) の整数位に満たない数字となっている。しかし, 翌81年には, 豊橋市の桑園面積は皆無となっている(愛知県「蚕糸業の現況」, 昭和56年度)。
- 24) 1950年(世界農林業センサス)には, 18反あった。
- 25) 『豊川用水史』1975年, 772~776ページ。石巻平野町と石巻小野田町(いずれも旧石巻村)の間で, 約86haが開墾されている。
- 26) 日本地誌研究所『日本地誌12』, 二宮書店, 1969年, 318~326ページ。
- 27) 『豊川用水史』, 前掲25), 713~796ページ。豊川用水の効果について具体的事例の記述がある。
- 28) 豊橋は, 温室園芸の先進地として知られる。既に, 今世紀初め(明治30年代中期)より北島町(当時, 宝飯郡半呂吉田村北島)において温室栽培が行われている。1940(昭和15)年ころには北島町から市の西部を中心に, 豊橋市・宝飯郡にかけて広く分布していた(愛知県実業教育振興会『愛知県特殊産業の由来』, 下巻, 1942年, 465~480ページ)。
- 29) 1980年世界農林業センサス

5 豊橋再生の特徴と将来

—むすびに代えて—

現在, 豊橋市の人口は303,800人(1981年10月1日推計)で, 愛知県東部の中心都市として発展しつつあるが, 調和のとれたまちづくりをめざし, 産業面でも「農工商の調和のとれた産業」の振興策がとられており¹⁾, その結果, バランスのとれた都市の諸性格がうかがわれる。

農業については, 既に若干述べてきたが, さらに就業人口(1980年国勢調査)についてみると, 第1次産業11.1%, 第2次産業37.6%, 第3次産業51.3%となっており, 愛知県の5.5, 42.4, 52.1%と比べて, とくに第1次産業の就業者の比率は2倍をこえ, 著しく高くなっている。

工業は, 現在, かつての製糸業のような著しく卓越するものはみられない。事業所数(1562事業所)でみると, 食料品17.2%, 繊維工業11.8%, 木材同製品10.4%, 機械9.2%, 金属製品7.7%, 従業者数(33,878人)では, 食料品17.8%, 繊維工業13.4%, 電気機器8.6%, 機械7.5%, 輸送機器6.7%, 出荷額(6,218.6億円)では, 食料品21.2%, 鉄鋼業12.6%, 繊維工業8.

8%, 輸送機器7.5%, 電気機器7.0%となっており²⁾, 食料品, 繊維工業などがめだつが, それも突出するほどのことはなく, 重工業製品とバランスがとれている。

岡谷や須坂の場合, 往時は製糸業, そして現在は, 前者が精密機械器具, 後者は電気機械器具の工業がいずれも卓越して, 単一工業への依存度が著しく高いという共通点がみられたが³⁾, 豊橋ではこれと傾向を異にしている。今日, 豊橋においては, 往時の製糸業のような独往的存在を示す工業はみられないのである。

強い田園都市的性格は, 須坂市の場合と同様であるが, ただし, 須坂市の場合, 桑園→りんご園という単一作物から単一作物への転換が徹底して進んだが, 豊橋では, 桑園から果樹や野菜類などへとバラエティに富み, 須坂と異なっている。

そのほか, 岡谷・須坂と異なる点は, 両市が戦災を受けず, したがって, 往時の製糸施設が多く残存(とくに岡谷市)し, これらが, 今なお, 使用また活用されている点であろう。市街地ではこれらの古い建物が散見される。しかし豊橋市では, 製糸工場の多くが焼失し, 残るのはほとんどない。また戦後実施された他都市の模範ともいわれる区画整理事業によって, まちは一新されている。

豊橋は, 1963年に工業整備特別地域に指定され, また72年には, 豊橋港が国際貿易港として開港されているが, これとともに, 臨海部における工業用地の造成も着々と進められ, 臨海工業地域としての発展が期待されている。経済低成長の折柄, 臨海埋め立て地への工場進出は今のところ活発さを欠くが, 期待は大きい。

このようにみえてくるとき, 豊橋の今後の飛躍的發展は間近いようにも思われる。かつての多くの製糸都市が内陸部にあって, その後の発展が何かと制約される場合が多いのに対し, 豊橋は地の利をえ, また発展のための基盤も着々と整備されつつあって, 他の製糸都市と比べ, きわめて有利な態勢にある。そしてその将来は, かつての蚕都, あるいは軍都といった単一的な性格の都市ではなく, 産業面のほか, その他の

面においてもバランスのとれた複合的、また総合的都市⁴⁾として発展して行くであろうことが予測されるのである。

- 1) 『豊橋 '82/市勢要覧』
- 2) 1981年、いずれも第5位まで(豊橋市「豊橋市の工業」1981年、同産業部商工観光課「とよはしの商工業」'82)。
- 3) 大迫輝通『蚕糸業地域の比較研究——温帯日本と熱帯一』古今書院、1983年、174~220ページ。
- 4) 工業都市、商業都市、交通都市、また教育都市、田園都市として。

〈追 記〉

本稿作成に当たって、とくに下記の方がたには多くの御指導と御援助をいただいた。記して感謝申し上げる(敬称略、五十音順)。

石川顕次(蚕糸倉庫)、大林 茂(大林製糸)、小栗直一(小栗商店)、小淵辰丙(二川学園)、加藤郁夫(繭検定所)、神谷 剛(同)、小林正治(同)、清水竑尚(清水製糸)、杉本文夫(三州玉糸生糸協同組合)、鈴木源吉(金伴繊維)、中村嘉明(乾繭取引所)、山本富男(愛知県園芸農蚕課)。